



AVSECOM

暗殺の壁面

SHINTARO ISHIHARA

石原慎太郎

あんさつ　へき　が
暗殺の壁画

いしはらしん　た　ろう
石原慎太郎

平成9年8月25日　初版発行

発行者——見城徹

発行所——株式会社幻冬舎

〒160 東京都新宿区四谷1-22-6

電話　03(5379) 8086(営業部)

03(5379) 8011(編集部)

振替 00120-8-767643

印刷・製本——図書印刷株式会社

装丁者——高橋雅之

万一、落丁乱丁のある場合は送料当社負担で
お取替致します。小社宛にお送り下さい。

定価はカバーに表示しております。

Printed in Japan © Shintaro Ishihara 1997



幻冬舎文庫

ISBN4-87728-487-7 C0193

い-2-2

暗殺の壁画

石原慎太郎

幻舎書庫

目次

一九八三年 夏 7

一九八一年 ボストン 23

一九八二年 東京 85

一九八三年 帰国 145

一九八三年八月 暗殺 229

一九八三年九月 究明 245

文庫版あとがき 316

解説 鈴木光司 319

暗殺の壁画

一九八三年

夏

どうにも不便だという家内との口論の末、その夏、ようやく電話を取り付けた山小屋へ、翌^{あくる}日曜日、午睡を破ってかかってきた電話は、皮肉なことに留守宅からだった。昼前、念のため電話番号は伝えたが、もちろん周りには教えず、滅多なことがない限りかけてくるなど言わせて、切ったばかりだった。同じ高原に來ている仲間からの、夕方から半ラウンドを廻るゴルフの時間の確認かと思つてとつたが、留守宅に來たばかりの家政婦が、緊張した声で私を確かめた。

「たった今、マニラにおられる若宮様から國際電話が入りましたが、お留守と伝えましたら、連絡して大至急向こうへかけてくれるようにとのことでした」

番号を告げた後、

「共同通信の事務所だそうです」

「至急と言つたんだな」

「大至急と」

「何か急な用だと言っていたかね」

「はい。アキ、ノ、アキノ様が、向こうにお着きになってすぐ、射たれて亡くなられたそうです」

手元のメモを確かめながらのように彼女は言った。

「ニノイが射たれたと」

「いえ、アキノ様が」

受話器を置きながら、隣の部屋で仕舞い物をしていた家内に私は声をかけた。

「おい、アキノがマニラに着いてすぐ、射たれて死んだそうだ。たった今、若宮から向こうに電話があつた」

家内は収^{しま}いかけていたものを手にしたまま飛んできたが、^{うなず}頷きながら私は、何故か自分の声がそんなに慌てていないのに気づいていた。たった今、国際電話で知らされた出来事は、あり得ぬながら、また充分にあり得る、信じまいとしながら、実は事の前からすでに私たちも予期していたことのような気がした。

かけ直したマニラの電話は、一度目は話し中で、次を待つ間、それが事実なら、もう

何を思い巡らしても詮^{せん}無いことと自分に言い聞かせながら、私は次第に落ち着いていた。

そして、やっと出た相手の、動揺し切った声がいっそう私を落ち着かせたと思う。

「畜生、やりましたよ、奴ら、やりやがった。僕の目の前で、アキノを射ち殺しましたよ。本当にやられちゃいました。飛行機を降りたと思ったら、いきなりパンパーンと、頭にまともにくらって、棒みたいに倒れて転がって、それきりでした」

顔こそ見えないが、泣いて叫ぶような、高く引きつった声で若宮清は言った。

私は逆に、限られた会話から何かを検証しようとしてもするように、自分でも意外なほど落ち着いた声で、メモをとりながら聞き返した。

「頭をか、頭をやられたのか」

「そうです、一発、四五口径の拳銃を引き出して、あっという間です」

「君は、それを確かに見たんだな」

「何を言うんです。僕の、目の前でですよ。僕のほかに台北から一緒に来ていた、共同の上田さんも見ました。目の前です。僕らがいちばん近いところにいたんです」

「射ったのは誰だ。それも見たんだな」

「見ました。アキノを迎えに来た兵隊です。下士官が三人くらいで、奴らがいきなり後

ろから射ちやがった。奴ら、本当にアキノをやってしまったんですよ」

「それで、確かに彼は死んだのか」

「わかりません。でも、ものすごい血でした。射たれて、一步二歩でばたーんと、膝もつかず、真っ直ぐに顔から倒れたまま動かなかった。血がだあっと流れて。至近で、頭をですからね。死んだでしょう。奴ら、その後、あつという間に彼の体を、停めてあつた空軍の車に押し込んで、走って消えました」

「至近で、頭に一発か」

「そう、一発、いや、二発か。あのね――」

何かを思い返しながら、自分をなだめるように、

「あのね、実に変なんです」

彼は言い直した。

「アキノが射たれて倒れたら、それが合図みたいに、彼の前の車から変な男がひよろひよろと出てきてね、奴ら、その男まで射ち殺したんです。いきなり返す刀で」

「誰をだって」

「変な、何かの制服みたいな青いシャツを着た男ですよ。そいつが急に車の陰からひよ

ろひよろと出てきたらね。そして、アキノを連れ去った後、かけつけた他の兵隊たちが何発も何発もそいつにぶちこんで、とどめを刺したんです」

たった今見たものを、もう一度記憶の写幕に映し直して見るように、前よりもずっと落ち着いた声で、ひとことひとこと自分に向かって確かめるように彼は話した。

「おい、君の今言ったことは大事だぞ」

私も彼のまだ揺れ動いている記憶の画像を覗き込むように聞き耳をたてながら、相手をもっと落ち着かせようとして言った。

「その、もう一人の男は、アキノと一緒に殺されたんだな」

「そうです」

「いや、一緒じゃない、アキノが射たれた後だったんだな」

「そうですよ。アキノが倒れたら、その瞬間、変な奴がひよろと車の横から出てきたんです」

何故かその場にいなくとも、その瞬間の人間たちの動きが目に見えるような気がした。以前、アキノのためにあの国へ出かけていった私を空港で待ち受け、飛行機の真下に停められていた軍の乗用車を私は思い出していた。

若宮は、空軍の車と言った。私は聞きながら、私を迎えていた褐色の大型乗用車を、くすんだ空色に塗り替えるだけですんだ。

しかし後になって違っていたのは、その車の型だけだった。アキノを運び去ったのは、くすんだ空色の有蓋の中型トラックだった。

「君と共同の記者の他に、それを見た人間はいるのか」

「いるでしょう。でも僕らがいちばん間近でした。夢中で追っかけていったんですから。そうだ、僕は、写真を撮りましたよ。時計も確かめて見ました。アキノが射ち倒されたのは、一時二十五分です」

「写真を撮った」

「撮りましたよ」

「何枚くらい」

「わかりません。時計を見た後、夢中で撮りました」

「君が間近で写真を撮ったというのを知っている者はいるのか」

「それはいるでしょう。周りに兵隊や私服が大勢いましたから」

「その後、普通に入国出来たんだな」

「出来ました。それでここにいます。この事務所、ヒルトンの中にあるんです」

互いに測り合うような沈黙があった。

「今、何か身の回りに異常はないか。そんな感じはしないか」

「ありません。でも、危ないでしょうね。そうなんだ、アキノは、向こうを発つ前、もし俺の身に何かあったらお前も危ないぞと言っていました」

「俺もそう思う」

「どうでしょう」

急に気負い込んだように、しかしはつきりとおびえた声で若宮は尋ねた。

「今日は日曜日だから大使館は開いていません」

「誰かいるだろうが、それより大使の公邸を探してすぐにかきこめ。俺の名前と、事後承諾をとるから、俺が外務大臣にも断わったと言っている。様子によったら、大使館の誰かに車で迎えに来てもらうんだ」

「わかりました」

急にひどく素直な、幼いほどの声で彼は答えた。